

# 誰もがホッとできる 「幸せの家」をめざして

夫と2人、畑のど真ん中で喫茶とイベントホール

シニアライフアドバイザー 松本すみこ

## 夫の定年はチャンス！

康雄さん（64歳）は、教員として十数年勤めた後、視聴覚教材センターや情報教育センター、千葉県環境影響評価審査室などに勤務し、2013年3月、定年を迎えた。定年後は農業をしながら、独居老人を慰問したり、買い物のお手伝いをしたりするという活動を考えていたが、自分で作った野菜を車に積んで販売するようなこ



イベントホールとカフェの経営を始めた酒井康雄さん・早苗さん

ともに関心があったという。

当時、町と商工会が国の補助を受けて、軽トラックに商品を搭載し、地域で巡回販売するという計画があった。仲間に入れてもらいたいと申し出たが、まだ何も販売したことはない人は難しいと断られてしまった。

一方、小学校教員の早苗さん（60歳）は、夫の定年を機に何か始めたいと考えていた。学校では自分の思いどおりにいかないことが多く、組織への物足りなさも感じていた。「もう人に使われるのではなく、自分の考えでやりたい」。また、50歳を過ぎたあたりから体調が悪くなり、子供たちと一緒に走れないと感じるようになっていた。だったら、辞めようか。早苗さんのそんな思いを、康雄さんもなんとなく感じていたという。そして、夫の定年の1年前に退職することにした。

早苗さんの事業プランは音楽主

JR外房線の茂原駅から車で10分。道路沿いの畑の中に、突然、北欧風の建物が現れる。酒井早苗さんと夫の康雄さんが経営する「リッカフスSA～NA（サーナ）」だ。起業してみたいという妻の夢に、定年後の人生を模索していた夫が賛同して実現した。自家栽培の野菜を使ったメニューとさりげないもてなしで、近隣の人たちがふらりと立ち寄る憩いの場となっている。

体のイベントホールと塾の運営。

そのころ、地域には皆が集える場所がなかったからだ。ただし、イベントはいつもあるわけではない。そこで、喫茶店もやることにした。喫茶店は後から思いついたアイデアだ。

その計画を聞いたとき、康雄さんは半信半疑だった。しかし、妻にそういうアイデアがあるのなら、やってみようかと意外とすんなり認めることができたという。「どちらかというところ、石橋を叩くタイプなんですけど、決まったら、どんどん突っ走る」タイプでもあるのだそうだ。

## 前進あるのみ

しかし、失礼ながら、この土地でこのアイデアは結構な冒険ではなかったか。早苗さんは「頭が都会になつていたんですね。そのギャップに気がついていたけど、もはや前に進むのみ。こういう地域に文



畑の中に建つ「リッカフスSA～NA」

化を広める役目もいいかと思いましたが」ときっぱり。

とはいえ、実現までは、慣れないことで苦労の連続だった。康雄さんの父親が持っている農地の一角を借り、宅地に転用して場所を確保したが、農地を宅地に変える手続きさえ知らなかった。

さらに、ライフラインの確保がある。田畑だから、水道もガスもきていない。水道は幹線から引くのに、1mあたり何万円もかかる